

## ドイツ語の虚辞 *es* の統語論\*

吉 田 光 演

### 0 序 論

ドイツ語の *es* は主格および対格の格形態をもつ単数・中性の代名詞である。*es* には一般に次の用法がある(対比の便宜のため英語の訳を記す)：

- (1) *Sein Kind ist sportlich. Es spielt jeden Tag Fußball.*  
his child is sporty.      it(=he) plays every day soccer (前方照応)
- (2) *Es regnete gestern stark.* (天候動詞の主語など：疑似項)  
it rained yesterday    hard
- (3) *Es ist gut, dass er gekommen ist.* (外置された節と関連する *es*)  
it is good that    he come      has
- (4) *Es kommen Tiere aus dem Dschungel.* (虚辞 (expletive) の *es*)  
there come animals out of    the jungle

(1) では *es* は主語に与えられる動作主役割を担う項として機能する。

(2) のような天候動詞の主語の *es* には指示対象はないが、必須の要素であり、疑似項 (quasi-argument) と呼ばれる。本稿ではこれらの文法機能を担う項の *es* は扱わない。(3) のように節と関連する場合の *es* の項としてのステータスは曖昧で、*es* が現れるかどうかは動詞・形容詞の語彙特性が関与する：

- (5) a. *Heute ist es (es) bekannt, dass er kommt.* (Pütz 1975)  
today is (it) known that he comes

## b. Heute ist es (\*es) angenehm, dass er kommt

today is (it) pleasant that he comes

“bekannt”のような形容詞では主語位置の *es* は随意的だが，“*angenehm*”の場合は *es* がなければ非文になる。ところが、自動詞の受動化（非人称受動）では（中域内の）主語位置の *es* は許されない（文頭の *es* は適格）：

(6) Gestern wurde \*es (es) getanzt. / *Es* wurde gestern getanzt.

yesterday was there danced there was yesterday danced

節を受ける主語位置の *es* は英語の虚辞 *it* に対応するが、虚辞の *it* が「節 (clause) は主語をもたねばならない」という拡大投射原理 (Extended Projection Principle: EPP) によって義務的に要求されるのに対して、ドイツ語の *es* は必須、随意的、現れると非文になる—というように複雑な分布を示す。

又、(4) の例に注目すると、主語に割り当てられる主題役割は名詞句 (NP) “*Tiere*” が担っており、文頭の *es* には何の主題役割も付与されない。

(6) の非人称受動における文頭の *es* も同様である。文頭に生じる *es* は純粋な虚辞で、主語の役割を果たさない。文 (4) の動詞の屈折は単数の *es* ではなく、複数の “*Tiere*” に対応している。(4) の用法の *es* は英語の虚辞 *there* と対応するが、虚辞の *es* は文頭にのみ現れる。又、英語の *there* 構文と共起するのは「存在」、「出現」の意味をもつ自動詞に限られるが、ドイツ語の場合にはそのような制約はなく、他動詞でも虚辞の *es* は現れうる：

(7) *Es* haben immer die Reichen die größte Macht gehabt.

there have always the rich people the largest power had

本稿の目的はこの虚辞の *es* の統語的な特性を明らかにすることである。伝統文法では文頭の *es* を形式主語とみなしたり、あるいは動詞第2位を導くための単なる穴埋め (“*Platzhalter*”) と分析してきた (Duden 1984)。しかし、そのような分析は不十分である。文頭の *es* は定動詞との一致を

引き起こさないから形式主語ともいえない（英語の *it* は動詞と一致する）。又、*es* を文頭の穴埋めと仮定すると、次のような非文（いわゆる定性効果）のケースは説明できない：

(8) \**Es ist er gestern gekommen.*

there is he yesterday come

そもそも指示内容のない虚辞は意味解釈上は一見不要の代物であるように思われる。もしそうであれば、虚辞 *es* の分布は純粋に統語的に説明されねばならない。Chomsky (1995) で提案されたミニマリスト・プログラム (Minimalist Program) では素性照合の観点から英語、ドイツ語、アイスランド語などの虚辞構文の統語分析の試みがなされている。しかし、虚辞自体は意味と関わらないにせよ、虚辞構文が虚辞をもたない文に対して何らかの意味の相違をもたらず可能性も否定できない。本稿では、生成文法の枠組みで行われてきた *es* の先行研究を批判的に検討し、最近の Chomsky (1995) の成果を組み込む形でドイツ語の虚辞 *es* の分布の統語的な説明を試みる。

## 1 Tomaselli (1986) の分析

Tomaselli (1986) は2つの COMP (補文標識) 節点を仮定し、節 $\bar{S}$ に直接支配された COMP2 に *es* が挿入されるという分析を提案した：

(9) [ $\bar{S}$  [<sub>COMP2</sub> *es*][ $\bar{S}$  [<sub>COMP1</sub> *kam<sub>j</sub>*][ $\bar{S}$  ein Mann *t<sub>j</sub>* INFL]]]

現在の X $\bar{P}$  構造に基づけば、*es* は CP 指定部に挿入されることになる：

(10) [<sub>CP</sub> [<sub>SPEC</sub> *es*][ $\bar{C}$  [<sub>C</sub> *kam<sub>j</sub>*]] [<sub>IP</sub> ein Mann *t<sub>j</sub>*]]]

Tomaselli は、主語 NP は [NP, S] 位置に生成され、ゲルマン系言語に特有の動詞第2位現象 (V/2) は、定動詞の COMP1 位置への移動 (= C への代入) と、任意の句の COMP2 への移動 (CP 指定部への代入) によって派生すると分析した。更に、Tomaselli は次のフィルターを設定して、*es* 挿入を導く：

- (11) 定動詞前置 (C 位置への移動) が適用された場合, \*[SpecC e [-wh]]  
(e: 空の要素)

平叙文の CP 指定部には必ず音形のある要素が存在しなければならない。話題となる何らかの要素が CP 指定部に移動すれば問題ないが、何も移動しない時に (11) のフィルターの故に表層構造で *es* が挿入される。(11) のフィルター自体は V/2 に動機づけられたもので *ad hoc* なものではない。英語やフランス語の虚辞—関連要素 (*expletive-associate*) 構文に見られるような強い定性効果 (*definiteness effect*) はドイツ語にはない (cf. Tomaselli 1986) :

- (12) a. \**There<sub>i</sub> comes the whole family<sub>i</sub>*.  
b. \**Il<sub>i</sub> arrive toute la famille<sub>i</sub>*.  
c. *Es kommt die ganze Familie*. (Tomaselli 1986)  
*it comes the whole family*

Tomaselli は *es* は単に (11) のフィルターを逃れるために CP 指定部に挿入されただけで、主語位置 (IP 指定部) とは何の関係もないと分析する:

- (12c') [<sub>CP</sub> *es* [<sub>C</sub> *kommt<sub>j</sub>* [<sub>IP</sub> *die ganze Familie* [<sub>I'</sub> *t<sub>j</sub>* ]]]]

しかし、ドイツ語には確かに他の言語ほど強い定性効果は見られないものの、主語位置に代名詞が現れた場合は虚辞の *es* は挿入できない:

- (13) a. *Gestern regnete es stark*. (= "Yesterday it rained hard")  
b. \**Es regnete es gestern stark*.  
c. *Es<sub>j</sub> regnete t<sub>j</sub> gestern stark*.

(13a) では "gestern" が話題化により CP 指定部に移動する。しかし、話題化は随意的だから、話題化が起きずに、代わりに *es* が CP 指定部に挿入されれば、この分析によれば適格になるはずだが、こうした派生は許されない:

- (13a') [<sub>CP</sub> *gestern<sub>j</sub>* [<sub>C</sub> *regnete<sub>i</sub>* [<sub>IP</sub> [*es*] *t<sub>j</sub> stark t<sub>i</sub>* ]]]]

- (13b') \* [<sub>CP</sub> *es* [<sub>C</sub> *regnete<sub>i</sub>* [<sub>IP</sub> [*es*] *gestern stark t<sub>i</sub>* ]]]]

このような場合、主語代名詞が CP 指定部に移動しなければならない：

(13c') [CP *es*<sub>j</sub> [C *regnete*<sub>i</sub> [IP [t<sub>j</sub>] *gestern stark t<sub>i</sub>*]]

CP 指定部への *es* 挿入分析は虚辞の *es* を V/2 のための穴埋めとして記述してきた Duden などの文法書との整合性はあるが、いま見た理由により過剰生成を行う。従って *es* 挿入以外の説明を探さねばならない。即ち、虚辞の *es* は何らかの方法で主語位置と関連していると考えられる。

## 2 Cardinaletti (1990) の分析

Cardinaletti (1990) は Tomaselli (1986) の *es* 挿入分析を批判して、*es* は主語位置の SpecI から CP 指定部 (SpecC) に移動すると考える。その際 Cardinaletti は、主語位置に現れうる虚辞として音形のない代名詞 *pro* も仮定する<sup>1</sup>。彼女の分析は概略次のようにまとめられる：

(i) *es* は  $\theta$  位置に現われる項か、又は非  $\theta$  位置に生成される非項 (虚辞) である。虚辞の *pro* は非  $\theta$  位置にのみ現われる非項である。

(ii) SpecI 位置には表層では *es* ではなく *pro* しか許されない。虚辞の場合、代名詞回避 (Avoid Pronoun) の原理によって、音形のある代名詞 *es* を避けて音形のない *pro* だけが認可されるからである。この理由から *es* と *pro* の相補分布が説明される (中域主語には虚辞の *es* が生起しない)。

(iii) 虚辞の *es* は SpecC 位置に挿入されるのではなく、SpecI (主語) 位置から文頭の SpecC 位置に移動することによって派生される。

Cardinaletti によれば、虚辞の *pro* は  $\theta$  役割が与えられない場合に主語位置に現れうる。例えば、自動詞 (非能格) の受動の場合である：

(14) a. *Gestern wurde pro getanzt.*

yesterday was danced (=There was danced yesterday)

b. \**Gestern wurde es getanzt.*

自動詞 “tanzen” は目的語をもたないので、主語位置に繰り上げられる項はない。しかし、EPP によって主語の位置自体は要求される。このよう

な場合、主題役割が与えられない虚辞として音形のない代名詞の *pro* が生成される。*pro* の存在は屈折の強いイタリア語 (*pro* 脱落言語) などでは明白である：

(15) *pro mangia.* (=he/she eats)

“*mangia*” は 3 人称・単数の屈折を示し、明示されないが「食べる」動作主の存在は明らかであり、*pro* は  $\theta$  役割をもつ空の代名詞である。これに対して、ドイツ語では  $\theta$  役割をもつ主語は省略できないので、ドイツ語は完全なゼロ主語言語とはいえない：

(16) *dass er/\*pro isst.* (=that he eats)

ところが、主語に  $\theta$  役割が与えられない場合は主語が不在である。つまりイタリア語と同様に *pro* が生じる。非人称受動以外でも、若干の動詞・形容詞で主語が脱落することがある：

(17) *weil pro/es mir kalt ist.* (=because I am cold)

*pro* 主語は拡大投射原理によって理論的に正当化されるが、経験的にも次のような対比によって証明できる (Haider 1993)：

(18) a. *dass pro wieder gearbeitet wird ist schön.*

that again worked is is good

(=it is good that people work again)

b. \**Wieder gearbeitet zu werden ist schön.*

Again worked to be is nice (=To be worked again is good)

c. *Geliebt zu werden ist schön.* (=To be loved is good)

不定詞句の主語は  $\theta$  役割を担い、ゼロ格を付与される PRO である (PRO は音形のない不定詞句の主語で、コントロール構文では主文の名詞句と同一対象を指し、それ以外では不特定の任意の対象を指す)。時制節の非人称受動 (18a) では *pro* が現れるが、不定詞句では *pro* は認可されないの、不定詞句における非人称受動は非文になる。他方、不定詞句における他動詞の受動では主語位置に主題役割が与えられるので、(18c) では PRO が生じる。もしドイツ語では主語がなくてもよい (EPP が適用

されない) と仮定すると, (18) の3つの文の対比は説明できない。このことから、ドイツ語の虚辞 *pro* の存在は正当化される。

Cardinaletti の分析によれば、文頭の *es* は中域内の主語位置 (SpecI) から SpecC 位置への移動によって派生される。この移動は疑問詞の移動と同様の  $\bar{A}$  移動で、話題化の操作である：

(18) [CP [es]<sub>i</sub>] [C' wurde]<sub>j</sub> [IP [t]<sub>i</sub> gestern getanzt t]<sub>j</sub>]]

↑ \_\_\_\_\_ |  $\bar{A}$ -移動

主語位置は常に痕跡 *t* が占めている。Cardinaletti は Beletti(1988) の分析に従って、不定主語は動詞句 (VP) 内にとどまって部分格 (partitive case) を付与されるが、定名詞句・代名詞は VP 内ではなく、SpecI に生成され、屈折辞 I による統率の下で主格が付与されると考える。従って、次の文は非文になる：

(19) \**Es* hat [IP [er] ein Buch gekauft].

there has he a book bought (=There has he bought a book)

*es* は SpecI 位置から文頭に移動しなければならないのに、(19) ではこの位置に主語代名詞 “er” が存在するので、(19) の派生はありえない。故に、*es* 挿入分析に伴う過剰生成の問題はもはや生じない。

しかし、Cardinaletti の分析にも次のような問題がある：

- ・主語位置 (SpecI) には2つの虚辞 (*es*, *pro*) が生成される。しかし、この位置で *es* が現れると非文になるので表層では *pro* しか認められない。これを導くのが代名詞回避の原理である。しかし、この原理は非文を排除するだけの強い文法的な原理といえるのか？<sup>2</sup> (14b) の文の容認度が落ちる程度であればこれで問題ないが、(14b) は完全に非文である。そもそも項のステータスがない虚辞にこの原理が適用されるのかどうか疑問わしい。SpecI では *es* は除外されるが、文頭の SpecC 位置では逆に *pro* は出現できない。Cardinaletti はこれは V/2 特性に基づくものと考ええる。しかし、*es* と *pro* は音形があるかないかの点だけで区別される虚辞であり、意味に関与しないそのような微妙な相違が果たして言語学

習者にとって獲得可能かどうか甚だ疑問といわねばならない。

- ・ *es* には項と非項（虚辞）の2つの用法があることになる。後者の場合、*es* には格は付与されるのか？（4）のような *es...NP* 構文では NP に部分格が付与されるので、*es* は屈折辞 I から主格を付与される。にもかかわらず動詞が *es* ではなく、NP と一致するのは何故か？

第二の問題に関して、Cardinaletti(1997)では、*there* は locative で、格は不要であり、ドイツ語の *es* は主格と対格の2つの格が可能で、曖昧であり、それ故に NP が論理形式 (LF) レベルで主語位置に上昇して動詞と NP の一致が起きると主張している。しかしながら、このような議論は形態格と統語的な抽象格（構造格）を混同してしまっている。虚辞の *es* の格は主格であると思われるが、この主格は構造格ではなくデフォルトとしての形態格であり、呼格における主格と同様のものである：

(20) Lieber Hans, was hat dir passiert?

dear Hans(NOM) what has to you happened

(4) のような虚辞構文の *es* には何ら構造的な格は付与されていないと考えるのが妥当であろう。更に、実質的な意味をもつ主語 NP は部分格ではなく、主格が明示的に付与されていると考えられる：

(21) (=4) *Es* kommen Tiere(NOM) aus dem Dschungel.

(21) で、NP の "Tiere" は派生のある段階で屈折辞 I の指定部に繰り上がって、主格の照合が行われ、人称・数の一致が生じる。よって、*es* が構造的に主格を得る余地はない（日本語の「・・・が・・・が」の多重主格構文とは異なる）。結論すれば、Cardinaletti の分析は Tomasseli の分析よりも優れているが、項と非項の *es* を仮定せざるをえない点で問題を残しているといえる。

### 3 代 案

以上の先行研究を踏まえ、本稿では虚辞に関して次の代案を提起する：

- i) ドイツ語の虚辞は音形のない *pro* だけであり、*es* は虚辞ではなく、 $\theta$



役割を担う項である<sup>3</sup>。虚辞構文で中域の主語位置 (SpecI) に生成される虚辞は *pro* だけである。故に “Gestern wurde es getanzt” のような非文はそもそも派生することはなく、Cardinaletti(1990) の代名詞回避原理は不要になる。

ii) V/2 文の文頭 (前域) に生じる虚辞の *es* は穴埋めの *es* ではなく、主語位置に生成された *pro* と等価である。即ち、*pro* が CP の指定部に移動した後、V/2 特性を満たすために PF (音韻部門) で *es* として具現するのである。即ち、文 (4) は以下のように派生される：

(22) a. [<sub>IP</sub> *pro* [<sub>VP</sub> Tiere aus dem Dschungel kommen]]

↓ 主語位置での *pro* の併合 (merge)

b. [<sub>CP</sub> *pro*<sub>i</sub> kommen<sub>i</sub> [<sub>IP</sub> t<sub>j</sub> [<sub>VP</sub> Tiere aus dem Dschungel t<sub>i</sub>]]]

↓ 動詞移動, CP 指定部への *pro* の移動

c. [<sub>CP</sub> *es*<sub>i</sub> kommen<sub>i</sub> [<sub>IP</sub> t<sub>j</sub> [<sub>VP</sub> Tiere aus dem Dschungel t<sub>i</sub>]]]

PFでの *pro* の音声形 *es* としての具現

主語 NP は (VP 内主語仮説に基づき) 動詞句の指定部に生成され、ここで動詞から外在項としての  $\theta$  役割 (動作主等) を付与される。主語 NP は人称・性・数 ( $\phi$  素性) と主格がマークされており、これらは屈折辞 (I 又は T, Agr) の領域に移動して照合される。ドイツ語の主語は表層統語レベルでは I の指定部に繰り上がる必要はない。これはまさに *pro* が I の指定部に併合 (merge) されるからである。実質的な主語はその後の目に見えない統語レベルである論理形式 (LF) の段階で繰り上がればよい。従って、(22a) の段階で I の指定部は空で、ここに *pro* が挿入される。既に見た通り、EPPに基づき、主語位置に何かがないからである。その後で動詞は機能範疇である屈折辞 I に繰り上がり、更に (文の法に対応する) C 位置に繰り上がる (C が強い V 素性をもつため顕在的な V 移動を引き起こす)。これにより CP (節) が投射するが、C は強い D 素性をもっており、+wh 素性をもつ疑問詞か、topic 素性をもつ話題要素が C の指定部に移動しなければならない<sup>4</sup>。ところが、(22b) では

これらの候補が何もないので、Cに最も近い主語の *pro* がその指定部に繰り上がる。これによってCの強いD素性は削除され、派生は収束し、LFレベルに受け渡される。最後に、ゲルマン系言語の特性である V/2 を満たすため、音韻レベルで音形のない *pro* に *es* という音声形が付加される。勿論、意味表示と関連する音声形を PF レベルで恣意的に加えることはできないので、音声形の付加という音韻操作は厳しく制限されねばならない。この場合、虚辞でかつ音形のない *pro* は V/2 の最初の要素としては認可されないという理由から正当化できる。又、指示対象が定かではない（天候動詞の主語や状況を表す主語の）疑似項でも *es* が現れるという意味でも虚辞 *pro* の具現形態として *es* は適切である。*es* は曖昧母音であるシュワーの [ə] と子音 [s] からなっており、形態音韻論的に最小の軽い要素という点でも問題はない<sup>5</sup>。

これらの仮定により、次の非文が説明される：

(23) \* *Es* hat [<sub>IP</sub> er ein Buch gekauft]. (= “He bought a book”)

代名詞は D(=determiner) 範疇で強いD素性をもつため、VP 指定部から IP 指定部に移動するので、(23) で主語代名詞 *er* は IP 指定部に繰り上がっている<sup>6</sup>。従ってこの位置に *pro* は現れることはできず、又、Cの指定部（前域）に *es* が併合することもないので、(23) の派生はありえない。

(23) の非文法性を定性効果（虚辞が定の主語 DP を束縛できない）に還元することはドイツ語では困難である。例えば次の文は文法的である：

(24) a. *Es ist dies das beste Resultat, das wir je hatten.* (Pütz 1975)

it is this the best result that we ever had

b. *Es kommst nur du in Frage.* (Zifonun 1995)<sup>7</sup>

it come only you in question

c. *Es habt ihr euch gemeldet, zwei Hausfrauen und drei Rentner.* (Engel 1977)

it have you self registered two housewives and three pensioners.

NP が定冠詞でマークされていても重要な要素であったり、人称代名詞でも *nur* 等によつて焦点化されたり、リスト読み (=24c) であれば、虚辞 *es* は生起可能である。この事実は、(24) の主語が顕在的には VP 内に留まっております、故に *pro* が SpecI に併合されるという仮定から導かれる：

(24b') ...[<sub>IP</sub> *pro* [<sub>VP</sub> *nur du in Frage kommst*]]

前域の *es* が定の主語を束縛できないということは絶対的ではなく、又、主語が不定の意味であっても *es* と共起できない場合がある。即ち、3人称・単数主語の代名詞 “*man*” は「不特定多数の人々」という意味である。しかし、*es* と “*man*” は決して共起し得ない：

(25) \**Es hat man hier viel getanzt.* (= “People danced much here”) 意味的・語用論的な説明ではこの現象は説明できない。ところが、“*man*” は中域の最初の位置にしか現れないことが知られている (Haider(1993): 76)：

(26) a. *dass man hier kein Adverb hinstellen soll*

that one here no adverb put should

b. \**dass hier man kein Adverb hinstellen soll*

“*man*” は強い D 素性を持ち、基底の VP 指定部位置から義務的に IP 指定部に顕在部門で移動する。“*man*” が移動した IP にはいかなる句も付加できない：

(26a') [<sub>CP</sub> *dass* [<sub>IP</sub> *man*<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> *hier t*<sub>i</sub> *kein Adverb hinstellen*] *soll*]]

SpecI には “*man*” が移動し、I の D 素性を照合するので、この位置に *pro* は併合できない。前域での *es* の併合もありえないと仮定するなら、*es* ... “*man*” の非文法性は束縛理論などの補助手段なしで即座に導かれる。<sup>8</sup>

#### 4 Chomsky(1995) の虚辞分析

本稿の *es* の分析は基本的に Chomsky (1995) のミニマリスト・プログラムが正しいことを示している。ミニマリスト・プログラムでは言語は調音・知覚体系で解釈される PF 表示  $\pi$  と、概念・意味体系で解釈される

LF 表示  $\lambda$  の対  $(\pi, \lambda)$  から成り立ち、言語の計算  $C_{HL}$  が構築する構造は語彙項目に現れる要素によってのみ作られる。文法的表現は PF, LF の両方の出力条件を満たすものである (=収束)。このペアリングを保証するものが完全解釈の原理 FI であり、収束する派生の中で出力条件を満たす最も経済的な  $(\pi, \lambda)$  の派生を作り出す条件が経済性原理である。派生のある段階  $\Sigma$  で文が収束する時に PF と LF に計算が受け渡される (Spell-Out)。 $\Sigma$  から PF に関連する要素だけが抜き出され、 $\pi$  に送られる。音韻部門における操作は聴覚体系に固有のもので、言語の計算から区別される。PF に関与する要素を抜き取った残り  $\Sigma_L$  は更に Spell-Out 以前と類似した操作を受けて LF に受け渡される (陰在的な統語部門)。統語操作 (移動) を受ける要素は、もし移動がなければ派生が収束せず、破綻してしまうという必然性に基づくものに限定され、これには PF, LF で解釈できない素性 (機能範疇の形式素性) が含まれる。

Chomsky(1995) の分析では、*pro* や英語の *there* は純粋な D 範疇であり、 $\phi$  素性も格素性ももたない。虚辞の存在理由はひとえに EPP を満たすため、つまり I (=Agr) の強い (解釈不可能な) D 素性を削除するためである：

(27) [<sub>IP</sub> [*there/ pro*] [<sub>I</sub>...I [+D]... NP]]

指定部                      主要部                      関連要素 (associate)

虚辞が SpecI に併合 (merge) することで、指定部—主要部の一一致の下で I の強い D 素性は削除され、EPP は満たされる。しかし I にはまだ時制 T の格素性 (主格) と  $\phi$  素性 (人称・性・数) が残っており、これらは Spell-Out から LF に至る見えない統語レベルで照合=削除されねばならない。これは関連要素である主語 NP の陰在的繰り上げによって実現する。即ち、陰在的な操作で NP の形式素性 FF が I に繰り上がる：

(28) [<sub>IP</sub> [<sub>DP</sub> *there/ pro*] [<sub>I</sub> [<sub>I</sub> FF(NP) I]... NP]]

[  $\phi$  素性, 格 ]  $\uparrow$  \_\_\_\_\_ | 形式素性の繰り上げ

これによって動詞の屈折形と関連要素の NP との一一致が起きる。この分析

は次のコントロールの可能性によっても証明できる (Chomsky 1995: 274) :

(29) a. There arrived three men<sub>j</sub> without PRO<sub>j</sub> identifying themselves<sub>j</sub>.

b. \*I met three men<sub>j</sub> without identifying themselves<sub>j</sub> .

(Chomsky(1995: 274))

(30) *Es* sind gestern viele Leute<sub>j</sub> angekommen, ohne PRO<sub>j</sub> sich zu identifizieren.

there are yesterday many people arrived without themselves to identify-

虚辞構文の関連要素は不定詞句の主語である PRO をコントロールすることができ、再帰形の先行詞になれるが、他動詞文の目的語の位置では PRO と同一解釈は不可能である (=29b)。同様に (30) で関連要素の NP “viele Leute” が VP 内にとどまっていれば、不定詞句の主語の PRO をコントロールするには構造的に低すぎることになる。故に NP の形式素性は LF では SpecI に移動する :

(30') *Es* sind [<sub>IP</sub> *pro* viele Leute<sub>j</sub> gestern [<sub>VP</sub> t<sub>j</sub> angekommen] ohne PRO<sub>j</sub>...]]

しかし、問題点も残っている。虚辞—関連要素の構文は Chomsky (1995) の分析で基本的に説明できるが、非人称構文における虚辞の取り扱いは説明できない。この場合、関連要素となる NP が存在しないからである :

(31) *Es* wurde [<sub>IP</sub> *pro* gestern getanzt].

there was yesterday danced

D 範疇である *pro* が I の強い D 素性と照合して、EPP を満たすが、*pro* には範疇素性以外の格素性も  $\phi$  素性もないとすれば、I の主格と  $\phi$  素性はどのように照合されるのか? 非人称構文では屈折形は全て 3 人称・単数である。指示対象が曖昧な要素 (疑似項や虚辞) のデフォルトの  $\phi$  素性が

3人称・単数であることはごく自然である。これを担うのは *pro* だけしかないのです、レキシコンで *pro* は随意的に主格と3人称・単数の  $\phi$  素性をもつと考える：

(32) a. *pro* : [音形 = 0, 意味 = 0, 範疇素性 = D]

b. *pro* の随意的な素性：[主格,  $\phi$  = 3人称・単数]

非人称構文では随意的素性をもった *pro* が併合することで、動詞の屈折形との格と人称・数の一致が実現し、派生が収束する（随意的素性をもたなければ、Iの格素性が照合されず、派生は収束しない）<sup>9</sup>。

## 5 虚辞—関連要素構文の意味

虚辞の *pro* (=es) はそれ自身意味をもたず、虚辞—関連要素構文とそうでない文の意味は同じで、そこには文体的な違いしかないという考え方もある：

(38) a. *Es* liegt ein Buch auf dem Tisch.

there lies a book on the table

b. Ein Buch liegt auf dem Tisch.

例えば荻原（1997）はこの方向でミニマリスト・プログラムの枠組みを用いて *es* の存在を純粋に統語的に説明する。しかし、本稿では（38a）と（38b）には文全体として意味の相違があると考ええる。（38b）では、主語 NP の “ein Buch” は話題 (topic) 又は対比的な焦点としてマークされ、CP 指定部（前域）に移動するが、（38a）では話題要素が存在しない。V/2 の要請により、話題になる要素が全くない時に、（38a）のような虚辞構文が用いられるのである。非人称構文でもこのことは明らかである：

(39) a. Gestern<sub>i[topic]</sub> wurde *pro* t<sub>i</sub> nicht gearbeitet.

yesterday was not worked

b. *Es* <sub>i[=pro]</sub> wurde t<sub>i</sub> gestern nicht gearbeitet.

（39a）では副詞の “gestern” が話題化され、「昨日は労働がなされなかった」という意味になり、「昨日」についての言明になるが、（39b）ではこ

の種の話題が欠落している。虚辞構文が文脈がまだ存在しない物語の冒頭に使われるのもこの理由からである (“*Es war einmal...*” のように)。話題というものは語用論的な問題に思われるかもしれないが、ドイツ語では CP 指定部 (前域) と関連しており、話題は統語構造に反映しているのである。故に虚辞—関連要素の構文では派生の前の段階 (numeration) において無話題の場合に *pro* が入っていく。非人称構文では *pro* はいずれにせよ存在するが、*es* が現れる場合は話題 [topic] 素性は存在しない：

(40) a. {*pro*, ein, Buch, auf, dem, Tisch, liegt} (38a) に対して

b. {ein, Buch [topic], auf, dem, Tisch, liegt} (38b) に対して

(41) a. {*pro*, gestern [topic], nicht, gearbeitet, wurde} (39a) に対して

b. {*pro*, gestern, nicht, gearbeitet, wurde} (39b) に対して

このように分析すれば、意味をもたない虚辞であっても、虚辞構文自体は意味 (出力) に影響を与えていると考えられる。

## 6 結 語

まとめれば、ドイツ語の虚辞 *es* の分布は次のように説明できる：

- i) ドイツ語の唯一の虚辞は音形をもたない代名詞の *pro* であり、名詞句が主語位置に繰り上がらない時、あるいは主語が存在しない時に拡大投射原理を満たす手段として主語位置 (SpecI) に生成される。
- ii) 前域 (CP 指定部) に移動すべき話題が存在しないとき、動詞第 2 位を満たすために、*pro* は CP 指定部に移動し、音韻部門で *es* として具現する。

代名詞脱落現象には、項が脱落するイタリア語や非項だけが *pro* になるドイツ語、そして *pro* がそもそも存在しない英語というように幾つかの変異が存在する。このパラメータがどのように導き出されるのか、そしてその中でドイツ語の虚辞のステータスがいかに説明されるかが今後の課題である。

## 注

\* 本稿の基本アイデアは1996年秋のドイツ語生成文法研究会（京都）での筆者の発表に基づく。又、1997年春季独文学会シンポジウム（『最近の生成文法理論から見たドイツ語統語論—ミニマリスト・アプローチ等をめぐって』）でも人称代名詞の移動に関する問題を発表した（吉田（1997））。参加者の方々、とりわけ荻原達夫氏、小野隆啓氏、鈴木直樹氏、田中慎氏、野村泰幸氏、保阪靖人氏らの貴重なコメント、批判に対して感謝の意を示したい。勿論、本稿における議論の誤り・弱点は全て筆者に帰することはいうまでもない。なお、ドイツ語を中心とした生成文法のメーリングリストを開設しているので、関心をお持ちの方は次の筆者のアドレスに電子メールを送りたい。  
mituyos@ipc.hiroshima-u.ac.jp

- 1 ドイツ語の *pro* の設定については、Safir (1985) を参照のこと。
- 2 ミニマリスト・プログラムに基づけば、*numeration* の段階で既に *es* と *pro* の異なった語彙を選んでるので、*numeration* 自体が異なるので、一方が他方の派生を阻止することはない。もっとも、意味に対応して最適の語彙を選択するというグローバルな原理が存在することは否定できない。
- 3 外置された節と相関する主語と目的語の *es* は Cardinaletti (1990) が主張するように、 $\theta$  役割を担う項である。即ち、節は  $\theta$  位置から右側へ外置（移動）するのではなく、基底で動詞句の右側などに付加されるのである。
- 4 Chomsky 1995の第4章を参照のこと。副詞句が話題化され文頭に移動する場合もあり、厳密に言えばCの強い素性はDでなくてもよいので、最大範疇（句）であれば何でもよい。しかしここではこの問題は度外視する。
- 5 Chomsky 1995 : 289でも V/2 が PF の問題であることが示唆されている：  
「中心的な N  $\rightarrow$   $\lambda$  計算には配列順序がないとすれば、V2 は音韻部門に属することになる。両言語（=ドイツ語、アイスランド語）とも、音形のある虚辞が用いられるのは、そうでないと V-2 特性が保てない場合である。もしこれが正しいければ、虚辞はゼロであり、範疇素性の D 以外には何も無い。音形のある素性がつけ加えられるのは、音韻操作の過程においてのみである。」（日本語訳は筆者による）

ただし、V/2 は常に定動詞の前に音声形を要求するとは限らない。いわゆる



ゼロトピックの場合がそうである：

i) (Hast du schon den Film gesehen?) -Ja, habe ich schon gesehen.

(=Have you already seen the film? -Yes, I have.)

CP 指定部 (=前域) に既知の話題がある時、随意的にこの話題が脱落することがあるが、これは一見 V/2 を PF 部門で処理する仮説への反例に見える。しかし、ゼロトピックでは、LF には話題 (“den” = “it”) が残っていて、PF で音形が削除されるが、トピックは文脈的に復元可能なものである。音声としては聞こえないが、音韻的には何かが残っているのであり、完全な空ではない。虚辞は復元可能な要素ではないから、トピック脱落と同列には扱えない。

- 6 ドイツ語の人称代名詞が中域内の左端に移動する現象はスクランピングではなく、代名詞の強い D 素性を照合するため、機能範疇 (AGR) 領域に移動するためと考えられる。吉田1997を参照のこと。
- 7 Zifonun 1995はこの例を生成文法による *pro*, *es* の分析に対する批判として挙げている (虚辞構文で動詞は *pro*, *es* の3人称・単数と一致するのではなく、意味上の主語 (“nur du”) と一致するから、*pro* は存在しない)。しかし、この例はまさに我々の分析が正しいことを示唆する。即ち、焦点化された “nur du” は VP 内にとどまれるが、“nur” がなければ、この文は非文になってしまう (SpecI に移動するため) : \**Es* kommst du in Frage.
- 8 Pütz 1975は「虚辞の *es* と人称代名詞の *es* は共起しない」という表層上のフィルターを提起している (\*“*es* regnet *es* strak”). しかし、これは絶対的ではなく、目的語の *es* と虚辞の *es* は (マージナルだが) 共起可能である：

ii) *Es*<sub>i</sub> weiss [<sub>IP</sub> *pro*<sub>i</sub> *es*<sub>j</sub> *ja* *niemand* *t*<sub>j</sub>]. (= “No one knows it”)

(グリム童話の例から)

iii) \**Es* weiss *ja* *es* *niemand*.

iv) \**Es* weiss *niemand* *es* *ja*.

目的語の *es* も強い D 素性をもつため、目的語 AGR の指定部に移動する。しかし、SpecI (=主語 AGR の指定部) には *pro* が生じうるから、ii) は問題ない。iii) は *es* が VP 内でかきまぜられる訳ではないことを示す (心態詞とよばれる副詞 “ja” が VP 境界をマークする)。iv) では主語の “*niemand*” が SpecI に移動したため、*pro* が生成できない。なお Chomsky (1995) に基づけば、I は AGR-S, AGR-O, T に分解されるが、本稿では簡略化のため I のまま表記する。

- 9 匿名の査読委員からこの分析を示唆していただいた。

## 参 考 文 献

- Beletti, A. 1988. The Case of unaccusatives. *Linguistic Inquiry* 19: 1-34.
- Cardinaletti, A. 1990. *Es*, pro and sentential arguments in German. *Linguistische Berichte* 126: 135-164.
- Cardinaletti, A. 1997. Agreement and Control in Expletive Constructions. *Linguistic Inquiry* 28: 521-533.
- Chomsky, N. 1995. *Minimalist Program*. MIT-Press.
- Drosdowski, G. 1984. *DUDEN Grammatik*. Mannheim: Dudenverlag.
- Engel, U. 1977. *Syntax der deutschen Gegenwartssprache*. Berlin: Erich Schmidt.
- Haider, H. 1993. *Deutsche Syntax - generativ*. Tübingen: Narr.
- Lenerz, J. 1994. *Pronomenprobleme*. In B. Haftka, ed, *Was determiniert Wortstellungsvariation?* Opladen: Westdeutscher Verlag.
- 荻原1997：統語論的ミニマリズムにおける虚辞の機能について —ドイツ語の *es* を例に。日本独文学会春季研究発表会。（シンポジウム『最近の生成文法理論から見たドイツ語統語論—ミニマリスト・アプローチ等をめぐって』における報告）
- Pütz, H. 1975. *Über die Syntax der Pronominalform es im modernen Deutsch*. Tübingen: Narr.
- Reis, M.(Hg.)(1993): *Wortstellung und Informationsstruktur*. Tübingen: Niemeyer.
- Safir, K. 1985. Missing subjects in German. In *Studies in German Grammar*, ed. J. Toman, 193-229. Dordrecht: Foris.
- Tomaselli, A. 1986. Das unpersönliche 'es'. Eine Analyse im Rahmen der generativen Grammatik. *Linguistische Berichte* 102: 171-190.
- 吉田 1997：ドイツ語の中域における代名詞の移動について。日本独文学会春季研究発表会。（シンポジウム『最近の生成文法理論から見たドイツ語統語論—ミニマリスト・アプローチ等をめぐって』における報告）
- Zifonun, G. 1995. Minimalia Grammaticalla: Das nicht-phorische *es* als Prüfstein grammatischer Theoriebildung. *Deutsche Sprache* I/95, 39-60.

## Zur Syntax des expletiven *es* im Deutschen

Mitsunobu Yoshida

Das Expletiv *es* (z.B. "es kommen Tiere aus dem Dschungel") ist bisher als "Platzhalter" betrachtet worden: *es* kommt nur im Vorfeld eines Verb-Zweiten Satzes vor und das Verb kongruiert mit einer anderen NP. Nach Tomaselli(1986) wird *es* in die Spezifikator-Position der CP (SpecC) eingesetzt. Dagegen zeigt Cardinaletti(1990), dass die Einsetzungsanalyse die Distribution von *es* nicht erklären kann: wenn das echte Subjekt z.B. ein Pronomen ist, darf *es* nicht vorkommen (\* "es kauft er ein Buch"). *Es* wird eher in der Spezifikator-Position der IP (SpecI) generiert und auf der S-Struktur ins Vorfeld geschoben. Falls das Vorfeld durch ein anderes Element besetzt ist, kommt das stumme Pronomen *pro* in SpecI vor ("gestern wurde *pro* getanzt"). Obwohl diese Analyse die Daten richtig erfasst, muss man zusätzlich annehmen, dass *es* zwar im Vorfeld erscheint, aber nicht im Mittelfeld (=in SpecI) vorkommt ("Avoid Pronoun"). In diesem Aufsatz wird gezeigt, dass in der SpecI-Position nur *pro* als Expletiv generiert und in die SpecC-Position geschoben wird, wenn es kein Topikelement gibt. Erst in der phonologischen Komponente (PF) wird *pro* phonetisch als *es* realisiert, um die Zweitstellung des Verbs sicher zu stellen. Damit braucht man das problematische Prinzip "Avoid Pronoun" nicht anzunehmen. *Pro* hat nur ein D (=Determinator)-Merkmal, so dass Kasus und das Kongruenz-Merkmal von einer anderen NP getragen werden. Diese Analyse erklärt auch, warum der Definitheit-Effekt im Deutschen nicht so stark ist: wenn das definite Subjekt fokussiert wird und damit in der VP bleibt, dann ist die SpecI-Position leer, so dass hier *pro* vorkommt: ("es<sub>i</sub> kommst<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> nur du in Frage] ").